

21世紀水倶楽部だより

発行：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部
発行者：大迫 健一
編集：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部 広報担当
〒171-0011 東京都豊島区目白2-1-1
URL <http://www.21water.jp/>
E-mail info@21water.jp

創刊準備号 2008年4月10日号

創刊の趣旨

編集幹事 望月 倫也

本「たより」はNPO21世紀水倶楽部の広報などの手段であるインターネットホームページを補完し、「紙媒体」でも読者の皆様の利便を図ろうとするものです。紙媒体とは言っても、メール送付先でのプリントアウトを期待する方式です。



ホームページ <http://www.21water.jp/> もご覧ください。

2007年度活動報告

「管路のアセットマネジメント」でシンポジウム G & U技術研究センターが協賛

理事兼事務局長 中川 幸男

2007年10月30日、東京・千代田区の砂防会館において、G & U技術研究センターの協賛で、「下水管路におけるアセットマネジメント」と題するシンポジウムを開催しました。

このシンポジウムでは、以下の方々が講師に招いて講演していただきました。

- 国土交通省下水道部下水道事業課 植松龍二企画専門官
「下水管路の維持管理の現状と今後の方針」
 - 国土技術政策総合研究所 藤生和也下水道研究官
「下水道ストックマネジメント(SM)研究の課題 ～主に管渠～」
 - (社)日本下水道管路管理業協会 田中修司専務理事
「下水道管路維持管理の問題点」
 - G & U技術研究センター 田中博常務取締役
「マンホールふたの維持管理の現状と問題点について」
- 非常に関心の高いテーマで、自治体職員や日本下水道事業団など60名以上の方々が聴講に参加していただきましたが、

INFORMATION

- 4/24(木)に研究集会「下水道事業と地域活動」を開催予定です。詳しくはホームページをご覧ください。
- 5/14(水)にはDSP(ディスポザー)関係のセミナー(第3回)を計画中。近日中にホームページに掲載予定です。

なかでも国総研の藤生研究官が紹介した「ワイブル近似の管渠耐用年数曲線」には大きな注目が集まりました。これは、人口寿命と全く同じ手法であり、寿命計算を、管の履歴データではなく、故障率データをもとに将来予測をする方法です。

また、管路協の田中専務は管路管理の必要性に迫力を持たせるために、生活環境の改善、公衆衛生の向上の観点から講演されたことには感銘を受けました。下水道事業をなぜ進めていくのか、その存在理由や本質をあらためて一般の方々に訴えていかなければならないと感じました。

さらに、最後に講演をいただいたG & Uの田中常務のマンホールふたに関わる講演は、当初は本シンポジウム全体のテーマとは異質な面があるかと思われた方も少なくないと思いますが、マンホールふたに関わる事故の多さから判断すると、独自のマネジメント手法が必要であるとあらためて認識させられました。

図 ワイブル近似の管渠耐用年数曲線

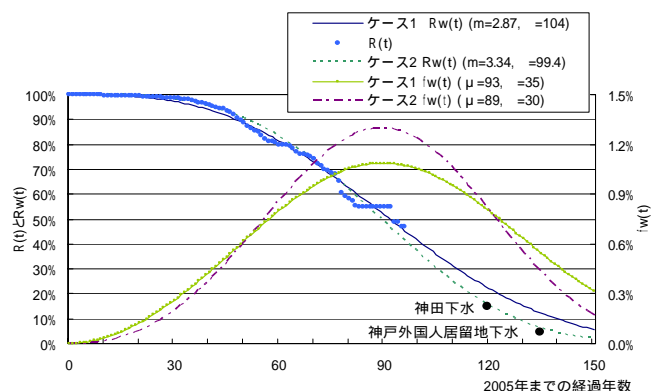


図-3 全管種合計のR(t)、R_w(t)、f_w(t)

このシンポジウムの講演集を作成しました。ご希望の方は、(株)G&U 技術研究センターまで申込みください(無料)。住所、氏名を明記の上、メールで。

E-mail: g-u_e@gucenter.co.jp

「閉鎖性海域と高度処理」で研究集会 瀬戸内海の水産業衰退をめぐって議論白熱

当研究集会幹事 佐藤 和明

2007年10月5日、東京・新宿区の(財)下水道新技術推進機構において、「閉鎖性海域と下水高度処理 どこまでやるのか!」をテーマとする秋の研究集会を開催しました。

この研究集会は、瀬戸内海の西部地区で漁業者を中心に栄養塩の削減効果に疑問の声が上がっていることを受けて、栄養塩削減の切り札とされる下水道は今後この問題についてどのように考えていかなければならないかを取り上げたもので、山口大学の浮田正夫名誉教授が「瀬戸内海の実態と今後の方策」、国土技術政策総合研究所の藤木修下水道研究部長が「海域の水質保全と下水道」をテーマにそれぞれ講演を行い、さらにそれをもとに参加者全員による総合討議を行いました。

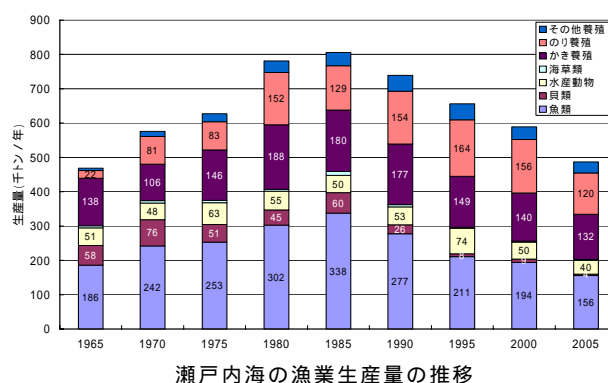
浮田名誉教授は、瀬戸内海の水質と負荷量の状況や、瀬戸内海の水産業の状況などを述べられ、水質はきれいになっているようだが、漁獲量はかなり減っており、その因果関係の解明には課題山積の感があると結ばれました。藤木部長は、平成16年度の第6次水質総量規制のあり方をめぐる議論や、日本にも及ぶ外洋異変の影響などについて紹介し、わが国における海洋基本法の成立や閉鎖性海域対策に対する国際的な動向についても言及されました。講演後の総合討議では議論が白熱しました。総合討議の中で興味深い意見を紹介すると、

- 山口湾は、子どもの頃は『宝の海』という感じだった。しかし、今は飽食の時代であり、食べ過ぎ、捕り過ぎがある。漁業技術の進歩もあり、魚影を確認してピンポイントで全部を捕獲することも可能となっている。このように漁獲量の減少は水質以外にさまざま
- 漁獲量の変化をすぐに海洋汚染に結びつけるのは早計。水産というのは産業であり、需要と供給によっている。海外との価格競争などにより、「捕らない」ことを選んでいる場合もある
- 栄養塩類については、生活排水が大きな原因となっている。やはり下水道が大きなポイントになると思う。しかし、

高度処理などの進捗が遅い。そのための取り組みを、国民運動に持っていくべきではないか

- 汚泥も忘れてはならない。セメント資源化されている汚泥が増えているが、リサイクルしていることに満足してはダメ。大事な成分を大地に戻すという努力も続けていかなければならない
- ボストン湾は水質だけでなく、街並みも含め、都市全体としてきれいになった。日本では全体が語られていないなどで、ざっくばらんで活発な討議が行われました。こうした議論から少し見えてきたことは、水産業の回復ということでも、ノリ養殖と底生魚類(貝類も含む)では自ずとその目標や対策手法が異なってくるということで、下水高度処理に要請されるレベルも同様に異なってくるであろうということでした。

図 瀬戸内海の水産物生産量の推移(浮田先生講演資料より)



先のグラフとやや異なるが、1985年をピークに著しい減少傾向にある。

編集幹事のあと整理

本紙は創刊準備号です。創刊号に向け読者の皆様のご意見、ご叱責もいただき、体裁等を整えたいと考えます。ご提案等があればメールでお願いします。info1@21water.jp 冒頭にも書きましたが、本「たより」の内容の詳細ほかすべての情報はホームページに掲載されています。

(以下、幹事のつぶやきです)インターネットの時代まったただ中ですが、ホームページを閲覧する人のほとんどの動機は、たぶん、情報の「断片」を求めてのものと推測しています。検索エンジンから回ってくるものが多いからです。インターネットの限界を感じたというわけで、この「たより」は紙媒体の時代に戻る始末となりました。しかし配布はメール添付のpdfファイルですから、必ずしも一歩後退ではなく、半歩後退(つぎは一歩前進)でしょうか?